



Title	外遊余禄（一）
Author(s)	森沢, 三郎
Citation	大阪外大英米研究. 1959, 1, p. 29-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98920
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外遊余録（一）

森沢三郎

I. 飛行機

北極廻りの航空路が開けてからは文字通り寝ている間にヨーロッパへ行けるようになったが、飛行機ずれのした連中になると「どうも北極廻りは使い水が少くて困る」てなことをいってこぼしている人もあり、贅沢をいう段になれば際限なく言えるものである。飛行の途中給水の機会が少いための小言であろうが、どの航空路でもまさか機上で入浴までさせているのは無いであろうし、食事のあとウォッシュン・ドライと称するアルコールをひたした紙で手を洗わせるくらい水を大切にしている（近東を飛んでいる時ある旅客が何と思ったかこの紙——畳んでアルミ箔に包んである——の液体をサラダの皿に絞り込んでいるのを見たことがある）。だから北極廻りに関する小言の内容が果してどんなことであったか、実ははっきりしない。ともかく二年近く前に聞いた話なのでそうした小言の種もとうの昔に解消しているかも知れない。

昨年渡欧の途中是非ともカイロへ立寄りたく思ったので、ペイルートからエール・リバン（レバノン航空）のお世話になった。エール・フランスの子会社だそうで、スチュアデスがフランス語で「サバ、サバ？」と押つけがましく褒め言葉を要求てくる。何しろローカル線で、お古の飛行機であるから大して快適とは言いかねるが、「トレ、ビアン」と調子を合わせておく。

ところがカイロ空港に着いて見ると、一台の飛行機が擱座している。何でも二日前にレバノンから飛んで来たところ、空港の上で着陸用の脚が出ぬので司令塔からの指揮に従って飛びつづけたが、二時間後ついにしづれを切らして操縦士は独断で胴体着陸を行い、四人の死者を出したそうである。エンジンにはまだ大ぶん油が残っており、最善を尽した後の処置とは言えないので、操縦士は厳しい譴責を受けたという。しばしば起るように着陸と同時に発火でもすれ

ば更に一層由々しい事故を引起したに相違ない。

その数日後、アテネ飛行場を出発する時待合室で一緒になったロンドンのB. B. C. でギリシャ語の放送をやっているギリシャ婦人と話しをしているうちに思わず知らずこの胴体着陸のことが話に出てしまった（やはり横倒しに投げ出された飛行機の姿が頭にこびりついていたものと見える）。すると見送りに来ていたお母さんが「もうその話はよしましょうね」と柔かく引き取った。

私はその後ヨーロッパのあちこちに立寄った上で、ロンドンに行き放送局の語学放送の模様なども視察することを予定していたので「B. B. C. でまた会いましょう」と言ってローマで別れたが、この婦人は昼頃アテネを出て夕方にはロンドンに着き（時差の関係もある）お母さんからお土産に貰ったチコリーの漬物を夕食にいただくのだといって楽しそうであった。

2. メモ代りの歌

「上舵」と機内放送が告ぐるとき大東京の光の海が！

海越えてマニラに我を運ぶ機の窓より低き北斗七星

バンコクに来ると何せし羽田にてタラップを軽く昇りたるのみ

カイロ近郊のマスタバの壁画

舞姫は倒れむばかり脚を挙げ五千余年をこの壁にゐぬ

メンフィスにきぞを遊びし仲間どち陽焼のしたる顔笑みかはす

アテネ考古館

ミケーネの有史以前の住民がおのづから成せるアブストラクト

ジャベリンを投ぐる男かいかづちをゼウスが将に下す姿か（青銅像）

たなそこにまひ澄むこまは失せたれど紐引き終へし右肘の張り（こまを廻す少年）

ローマにて

ローマなる四つの大寺なかんづくマリアのみ堂あやにゆかしき

バチカンよりも由緒正しき法王の本拠と誇るラテランの寺
「仙台の伊達政宗が吸ひまつるハッハのみ足」と文寄せにける

イス、 ドイツ

レマン湖のかなたの山に雲起り近き水際に脚立が一つ
弾痕を留むるビルに励みつつドイツマルク重からしめぬ
ブランデンブルグ門にて目に見えぬ鉄のカーテン推し入りにけり
ロシヤの挙げし成果認むとつぶやきぬ我と来りし西ドイツ人

フランス

パリらしく街の家並のなりにけり遠くはあらじアエローガール
いそがしき旅程の中にモンナ・リザ一つを見むと来りたる人(ルーブル美術館)
シャンデリヤ重く垂れたりひむがしのバッカラに得し紫水晶(ベルサイユ)

イギリス

うべしこぞ都の肺と名づけたれ旅人われを息づかしむる (ハイド・パーク)
ハイド・パークのマーブルアーチ・コーナーに一人の党も言挙げをする
春さればサーペンタインの水際なる芝生の上にポートつくろう
ロンドンの中心街に行くことをアプ・ウェストと誰が言いそめし
憂ひつゝ林子平が隅田川に通ずと言ひしテムズ川これ
八十八をハイチャイというコクニーの訛りもすでに耳に親しき

3. ブラッセルの一夜

「ブラッセルの一夜」といえば、尻取り遊びではないが「一夜のアヴァンチュール」という言葉が続きそうである。しかしこれはまたひどく艶消しのアヴァンチュールなので、前もってお断りしておく。

イースター季節は何もかも休止してしまう。開いているのはブリッッシュ・ミュージアムくらいのものではなかろうか。そこでこの期間を利用してもう一

度大陸に渡ることを思い立った。スコットランドからデンマークに渡ることも考えたが船便が悪い上に海上36時間というのに恐れをなして計画を縮少、パリジからフック・オブ・ホーランドを経てアムステルダムに行き、ハーグ、ライデン、デルフト、ロッテルダムなどを一見してベルギーに入り、20年に1回という大規模を誇称した1958年のブラッセルの博観会を見物するだけで満足することにした。

この博覧会は4月から9月までの観光シーズンを覗って開催、物凄い前景気でブラッセルの旅館などは半年前から予約すみという勢い。ことに私の場合は開会後1週間の最も混雑した時に飛び入りをしようというのであるから、夜は遙にブラッセルから退去して片田舎のはたごに夢を結ぶことが出来れば上乗の部と腹をきめていた。

ところでブラッセルへ着いて見ると意外な援助者が現われ夜まで待てば市内に宿を世話しようという。渡りに船の話なので当方に異存のあろうはずはなく夕方から約束の待ち合わせ場所に待機したが、頼うだお方が仲々現われぬ。時計は既に10時、やはり話がうま過ぎたのだなと観念し始めた時電話のベルが鳴り、すぐ行くという。やがて本人が現われ、私を自動車で「宿」まで運んでくれた。宿というのはある航空会社のスチュアードの家で、かれの休暇中特に外国人の旅客を引受けたものの、たまの休みを細君と楽しむために夜分になってから家に帰るという条件をつけており、そのため私も10時過ぎまでお預けを食ったという次第。

その夜は遅くまで宿の主人の戦争中の体験談を聞き入った。かれは第一次大戦の時父が出征したあと、家族と共にフランスに避難した淡い記憶をもっている。第二次大戦では独身の青年として、ドイツの侵入と共に先ずフランスに逃れ、更に国境を突破してスペインに入り、枢軸側に親しい関係にあったフランコ政府に捕えられた。のち米国のアフリカ作戦の威圧によってスペインが連合国側の捕虜を釈放すると、かれも自由の身となりスペイン各地の温泉場などを廻って悠々と骨休めをした。ただし平和克服後、この時の費用が連合国の一

ル勘定からベルギー政府に移され厳重にかれから取り立てられたのには閉口したとかれは苦笑しながら話した。それは後のことで、スペインから英領シブルタルに入り英軍に編入せられベルリン占領軍に加わり、東ベルリンに来たソ連軍とも顔を合わせたという。「この子が大きくなったら ツイツ兵がまた来ますぜ」と3—4才と見える一粒種の男の子を指してかれがいようと「いや、こんどはソ連兵ですよ」と細君がすかさず反論したのは印象的であった。

翌朝は早く宿を出てワーテルローの見物に出かけた。夜の帰りは8時過ぎに願うという言葉を背に聞き流して。

4月初めの夜8時といえばブラッセル辺ではとっぷりと暮れている。いよいよ宿に帰ろうとすると、迂闊な話であるが、宿の番地と地図との突き合わせができない。というよりは宿が新開地なので、地図に出ていないのは勿論、タクシーの事務所などで聞いても一向要領を得ない。それにブラッセルのその時の状況として新に宿を見つける可能性は全然ない。思えば東京を出て十数カ国を歴訪し、なまじっか旅馴れた感じを持ち始めたとがめが、はしなくも現われてお先まっ暗の形となった。

それでもともかく見覚えのある所までたどりつき、かなりの自信をもって宿に近づいた。その途中、両側の家はほとんど室内の灯火を消し、物淋しい。ふと薄暗い街灯の下に自家用車を修理する人にぶつかった。この処を黙って行き過ぎれば文句はなかったが、つい人なつかしさの余り言葉をかけた。「どこへ？ ああ、そこなら知っています。送ってあげましょう。エエ。もう修理はできました。さあ、ご遠慮なく」とせき立てられて、ふらふらと乗り込んだものだ。この時かれこれ9時過ぎにはなっていたろう。

すると自動車は私の思っているのと反対の方向へ疾走はじめた。「ダメだよ君」「大丈夫。任しときたまえ」「冗談じゃない。それそれ。また公園の近くへ来てしまつたじゃないか」「ガソリンはボクのだよ。構うことはない。序のことと運河の夜景をお目にかけよう」どうやらかれも思い違いに気がついたらしく、ドラメブ30分あまりの後、出発点まで引返すことを同意した。

それからあとはかれも私の指示に従ってくれ、10時ごろ無事に宿に帰ることができた。随分と気をもまされたが、まことにきつぶの良い、ブラッセルの一夜を忘れ難いものしてくれたかれであった。

4. 奇 遇

ロンドンに予定していた滞在期間の終頃、なるべく巾広く小学から大学までの種々の学校での、主として英語の授業を見学出来るようブリッッシュ・カウンシルに斡旋を依頼してあったので、イースターの休暇が明けると間もなく、かなり充実した予定表が手許に届いた。もちろんその全部を消化しなくてもよいのであるが、こちらから言い出したことでもあり、折角公文書でかけ合ってそれぞれの学校の承諾を得てくれたことを考へるとやはり顔出しくらいはした方がよさそうである。しかし時として朝から始めて夜学にも及ぶような場合には旅先ではやや重荷に感じたことも無いではない。

こうした学校訪問の一つでロンドンの東北郊にあるハクニー・ダウンズ・スクールというところを訪れたことがある。ダウンズといつても別に小高くなっているわけではなく、すっかり整地のできた平地である。これはセカンダリー・グラマーという種類の学校でいわば正統的な高校である。それに対するものの一つがセカンダリー・モダーンと称するものでこれは職業教育に重きを置いているようである。セカンダリー・モダーンの校長で少し威勢のいい連中は、「セカンダリー・グラマーは単にヴォーカル・アビリチーを大切にして」などという。「腕で來い。卒業後の生活能力を見てもらいたい」というところであろう。反対にセカンダリー・グラマー・スクールの言い方では、それはインテレクチュアル・アビリチーとかアカデミック・アビリチーとかいう言葉に置き換わる。

従来、ことに戦前において、グラマー系統の教科が極めて重視されたことは周知の通りで、この種の「一般的」「知的訓練を目的とする」課目を了えた上、処定の試験に合格した者に与えられるスクール・サーチフィケートは、マトリ

キュレーションに代って大学入学の資格となるのみならず、知的職業団体に加入する場合の予備試験の免除の特典とも結びつき、将来昇進の見込みの多い職種へのパスポートとなっていた。これに対して戦後最も目立った発展は少年少女の70%が利用するセカンダリー・モダン・スクールの充実であって、この種の学校のあるものは技術的な教育に力を入れると共に、（スクール・サーチフィケート、および更に高度のハイヤー・スクール・サーチフィケートに代ったところの）シネラル・サーチフィケートの試験にも優秀な学生を受験させる実績を示すに至った。なお興味ある実験として、グラマー、およびモダンの両系統のものを一つ学校に含むコムプレヘンシヴと称する形態のものも小数ながら設立されている。

さて書き出しからすぐに横道へ入ってしまったが、ハクニー・ダウンズ・スクールは戦前に建てられたもので、周囲に住宅が発達し土地不案内の者には判りにくいかもし知れぬというので、カウンシルから案内をつけてくれた。ロンドンに着いた当座こそ私も地図を頼りに目的地に達することに子供らしい満足を感じていたが、それはロンドンのみならず番地の整理のよくついている西欧の都市では極めて容易なことなので、この頃になるとむしろロンドン人とと共にロンドンの街を歩き何かと耳学問をすることが遙に楽しいことを理解するようになっていた。

ところでこの朝の案内に当ったのはウイリヤムスン女史で、夫君はロンドン大学の英國憲政史の教授、夫人も政治学の著書をもっている。バスの2階でロンドン大学の入試の際にドイツ語、フランス語の試験を夫人が担当していた時のことなどそれからそれへと話していると、後の席から一人の実業家らしい人がのこのこやって来て、実は私の息子もこんどロンドン大学を受験するが、ドイツ語の指導をして頂けないものでしょうかという。そこで二三言葉のやり取りがあって結局適当な人を推薦してさしあげましょうということに落ちつく。いざくも同じ親心で、たまりかねたものか、矢庭に他人の話の中に割り込んで来るという英国人としてはやや破格の行動に出たわけだが、ともかく車中の雑

談がこういう展開を見たのは、今日は朝から面白い日だという期待に似たようなものを感じさせられた。

さて学校に着いてみると、この学校は校長、教頭をはじめケンブリッジ出身が多く、ケンブリッジへ行ったかと早速の質問である。「ええ、2週間ばかり前に」というと、それは良かったとしきり話がはずむ。ケンブリッジ大学の新しい図書館に備えつけられてあるスマート・デテクターのことは校長、教頭ともにご存じない。シガレットの薄い煙にも敏感に反応して警鐘を鳴らすこの安全装置は愛煙家の脅威となっており、京都から留学中の先生も読書室で一服やれないのには往生するとこぼしておられると。これはケンブリッジのキーデル先生から聞いた内輪話である。

ウイリヤムスン女史が辞去したあと、休憩時間になると、教頭が案内して10人くらいの主だった(?)先生がたに紹介して回る(1日だけの訪問者に対しご丁寧なこととも思うが、やはりそうせねば氣の済まぬ所が英国人気質ともいうであろうか)。すると突然「やあ、あなたでしたか」と呼びかけて来た一人の先生がある。私はしばらく呆気に取られていたが、かれが一層近づいて窓ぎわの明るい所に見覚えのある顔をあらわすと思わずあっと叫ぶところであった。

かれは私が10日程前ブラッセルから英国に引返そうとしてオステンドに船を待つ間に30分くらい立話をした相手であった。どちらからも名を名乗らず、職業にも触れず、ベルギーの印象など語り合って船に乗り込み、別れ別れになつたまま、ドーバーでも言葉を交すこともなく下船してしまったが、それがこの学校で数学を担当するカランド氏その人であった。

「この広いロンドンでよくもまあ」とみんなが私たちの奇遇を興がり、校長は昼食の際にカランドさんを会食者の中に加えて私をもてなしてくれた。旧知ということになると何となく心易く、話もザックバランにできる気がする。早い話が便所のことである。戦前の建築にかかるこの学校では便所は「お手洗い」ではない。水道の蛇口らしいものは全然その付近に見当らない。そこで私は思わず「どうして」とカランドさんに聞いた。われながら随分遠慮なく尋ね

たものである。するとかれは、顔を5分の1ほどほころばしながらこう答えた。

「多分われわれ英国人の不潔な習慣によるものでしょう」

× × × ×

ここで終ってしまうと英國人に対してやゝ公正を缺くことになるから、ほぼ同じ事情はヨーロッパの他の国にも一般的であることを言い添えなければなるまい。かつて南支那で鉄道の駅の近くに前方を明けはなした便所が多いのを見て驚いたが、それと同じ形式のものが（よしず張りでない点だけは違っているが）ヨーロッパにもアメリカに至るところにあるのを見て二度驚いた。

方角音痴という言葉はいかにも奇妙な言葉であるが、使っている人もあるようだ。ともかく私は方位感が実に鈍く「エレベーターに東向いて入ると北向いて出て来る」とよくいっていたものだが、海外では構造上の都合から本当に東向きに入って西向きには出ず、北向きや南向きに出るエレベーターが珍らしくない。言わうとするところは世界は広くて、種々様々のものが転っているというにあるが、案外このようなエレベーターも日本の、しかもつい目の先の所に、動いているのかも知れない。